

## 豊田高专における英語多読授業の成果と課題

(豊田高专) 西澤 一、吉岡 貴芳  
伊藤 和晃、深田 桃代、長岡 美晴

### 1. はじめに

豊田高专では、電気・電子システム工学科(以下E科と略称)が英語多読授業を導入して6年、多読授業を本科2~5年と専攻科1、2年の6学年に拡大して4年が経過、2008年度の専攻科学生は5年目の多読授業を受講している。図書館の多読用図書は12,373冊、朗読CDは1,896組へと増加し、授業だけでなく、地域の社会人の多読(生涯学習)を陰で支える役割も果たしつつある。2008年度からは、本科1年の全学共通科目「英語会話」における多読・多読授業が始まった。

本稿では、2007年度までに4年間継続して多読授業を受講し、TOEIC得点も上昇、英語への苦手意識を解消した本校5年生の状況を中心に、本校の多読授業の成果と課題を報告する。

### 2. 多読授業の実施状況

本校では、多読用図書の大部分を図書館に集め、E科の多読授業は主として図書館で行っている(写真1)。図書館内に散らばった約40人の学生への選書指導を、短い授業時間内に完了させることは難しいため、読書記録手帳を介した指導が中心となっている。すなわち、全受講生は多読記録を手帳に記入して授業前日(または前々日)に提出。担当教員がコメントを記入し、授業開始時に返却する。学生は、同コメント、配布資料等を参考に、各自が読む図書を選択するのである。



写真1 図書館の多読用書架(の一部)

読書記録は専ら選書指導に活用し、読書量を成績に直結させないよう評価を工夫している。具体的には、読書量の評価比率を5~10%と低く設定し、語数が増えると評価点が飽和する(ので、多少余分に読んでも評価点は上がらない)ようにしている。本科3年向けの評価比率を表1に示す。

表1 「電気英語基礎」成績評価(2008年度)

評価項目	比率	内容(総合60点で単位修得)
定期試験	40%	YL1.8, 4500語の初見英文 Reading
読書記録	10%	3万: 39点, 10: 60, 30: 79, 100: 100
TOEIC	30%	TOEIC370点: 60点
Dictation	10%	年8回
Reading	10%	年1回(9月) 定期試験と同形式

YL: 日本人学習者にとっての読みやすさレベルで、GRは0.8~6.5、一般小説は6.0~8.5程度である

Reading試験は、制限時間(読書速度毎分100語で計算)内に初見英文を読ませ、英文回収後に、内容に関する日本語の質問に解答させる方法であり、直前の試験勉強は不要である。また、TOEIC等外部試験を、高めの評価比率(30~41%)で成績評価に組み入れているが、「多読で英語力がつけば、自然にTOEIC得点も上がるから」と、なるべくTOEIC受験対策の勉強はしないよう呼びかけている。

定期試験(Reading)の英文水準(表2)は、多読継続年数の増加に合わせて、見直して(上昇させて)きた。2008年度は、累積読書量が中央値で80万語を超える見込みの専攻科2年生で、YL3.0程度の英文を用いる。

表2 学年別(Reading)の試験水準(2008年度)

学年	多読授業	YL	英文長さ	基本語彙
本科2年	1.7年*	1.2	3,000語	300語
本科3年	2.7年	1.6	4,500語	400語
本科4年	3年目	2.2		500語
本科5年	4年目	2.4		600語
専攻科1年	5年目	2.6	6,000語	700語
専攻科2年		3.0		900語

\* 45分×30週で1.0年、30分×30週で0.7年とした

2004～2007年度の4年間継続して多読授業を受講した学生37人の累積読書量分布を図1に示す。読書速度に変化が現れ、学生の多くが読解力の向上を実感すると判断している30万語<sup>1)</sup>以上読んだ学生は31人(84%)である。

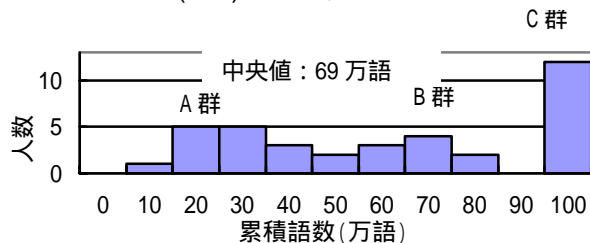


図1 4年間継続受講生の累積読書量(語数)分布

授業時間内に読書時間を確保した(22.5時間×4年=90時間)ことで、最低限の読書量(毎分80語で43.2万語)は確保できている。受講生は授業時間内のみ読んでいるA群、授業時間外にも同程度の時間をかけて読んでいるB群、時間外の読書がメインのC群の三群に分かれ、読書量分布のばらつきは大きくなっている(累積読書語数の平均値は、よく読む少数の学生の影響が大きいため、中央値を用いて表記する)。

今春の図書貸出冊数から見た人気シリーズは、FRL(Foundation Reading Library)とRainbow Magicである(図2)。本校図書館ではYL0.8以下の本(例えば、ORT1~8, LLL1~6)を館内専用に行っているため、多読初年度学生の貸出が、(貸出を許可している)FRLに集中したことが効いている。また、レベル2の児童書では、これまで人気の高かったMTHに代り、より読みやすいRainbow Magicの人气が高い。日本人好みのあっさりした線画のイラストが随所に散りばめられ、予測可能なストーリー展開(細部を飛ばしても大丈夫)で、読みやすい。(通学電車では読めないというが)男子学生にも人気がある。

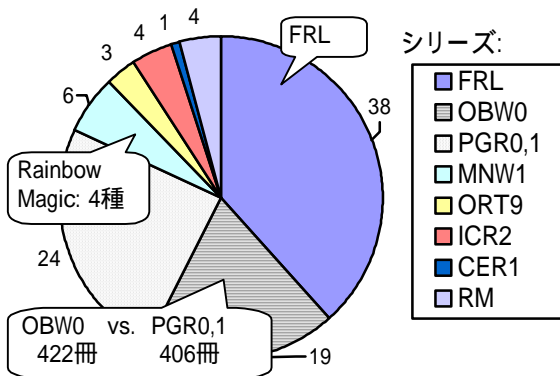


図2 ベスト100のシリーズ構成(2008年5&6月)

GRの入門レベルでは、作品数の豊富なPGR0,1とOBWOが人気を分けている。ベスト100入りしたタイトル数ではPGR0,1が多いが、総貸出冊数ではOBWOが上回る。ICR2の4タイトルはいずれもFrog & Toadシリーズであり、コンスタントに人気がある。今後は昨年度に導入したCD付タイトルの利用拡大を見守りたい。

#### 4. 多読授業の効果

外部試験(TOEIC, ACE)で測定した学生の英語運用能力の改善状況を概説する。まず、2007年度の学科学生の学年別TOEIC(年間ベスト)平均点を見ると(図3)、多読授業1.7年目となる本科2年生のTOEIC平均点は同年代の高校2年生全国平均よりやや低いものの、多読授業2.7年目となる3年生から4年目となる5年生では、同年代の高校生平均、(文系を含む)大学生全国平均を超えている<sup>2, 3)</sup>。

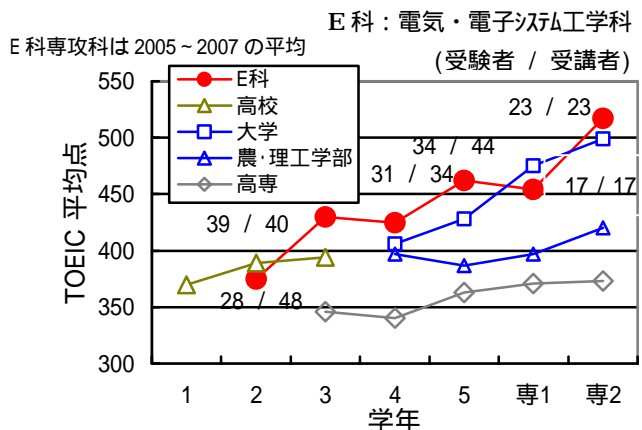


図3 学年別TOEIC平均点(2007年度)  
複数回受験した場合は最高点(年間自己ベスト、専2は2年間の自己ベスト)。公開受験、団体受験区別なし。E科データからは、外国人留学生、英語圏への留学経験者(2年1名、3年8名、4年2名、5年2名、専1年3名、専2年1名)を除外。

多読授業を複数年継続することで、TOEICで測定できる英語運用能力は着実に上昇することが分る。本校以外にも、多くの高専で英語多読授業実践が始まっていることから、従来の定説:「大学受験の無い高専では英語学習の動機付けが弱く、英語運用能力も世代平均以下となるのは仕方ない。」は訂正され、「大学受験の無い高専では多読を実践しやすく、英語運用能力が世代平均以上になるのは当然である」に変わることを期待している。

次に、読書量の違いによるTOEIC得点の差をみ

る。4年間多読授業を継続した学生のうち、2007年度にTOEICを受験した30人の得点(年間自己ベスト)を、読書量(累積語数)で3つの群に分け、図4に示した。外国人留学生と英語圏への留学経験者は除いてある。また、比較のために、英語圏への留学経験者の得点分布を付け加えてある。

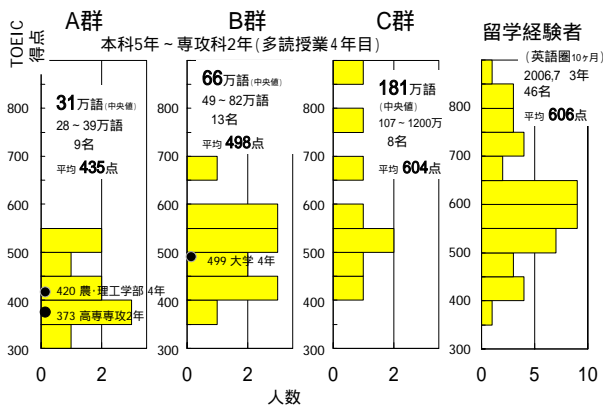


図4 累積語数別のTOEIC得点分布(多読4年目)

図4では、最も読書量の少ないA群でも28~39万語の英文を読んでおり、TOEIC得点分布が多読導入前から変化している。A群のTOEIC平均435点は、2007年度の高専専攻科2年平均より61点高く、農・理工学部4年平均、英文科を含む大学2年平均並みである。すなわち、30万語程度の読書量(授業時間内しか読まない学生群)でも、4年間の多読授業により、英語を苦手とする高専生の英語運用能力が同世代平均並みまで改善されることが分かる。

読書量49~82万語のB群では、得点分布が高スコア側にシフトし、13人中12人がTOEIC400点以上である。高専・大学工学部がJABEE対応プログラムの修了生全員にTOEIC400点を保証しようと考えた場合にも、この程度の読書量を確保することができれば、多読授業の追加だけで対応可能と言える。

さらに、読書量107~1200万語のC群ではTOEIC平均が604点であり、英語圏に10ヶ月滞在した本校3年生(2006,7年度に帰国した46名)の平均606点と同水準になっている。多読と留学では、体験の質が異なり、安易に比較できないが、少なくともTOEICで測定できる基礎的な英語運用能力については、数百万語の多読が留学に匹敵する可能性を示している。

30万語より少ない読書語数では、多読の効果をTOEICで検出することは難しかったが、ACEで測定できることが分ってきた(図5)。ACEはTOEICによく似た形式の試験であるが、Listening部門の

朗読速度が低く抑えられ、語彙・文法部門の得点比率が高い等、高等学校における英語教育の成果が現れやすい試験である。本校では、2003年度から本科2年生の英語運用能力測定に用いている。

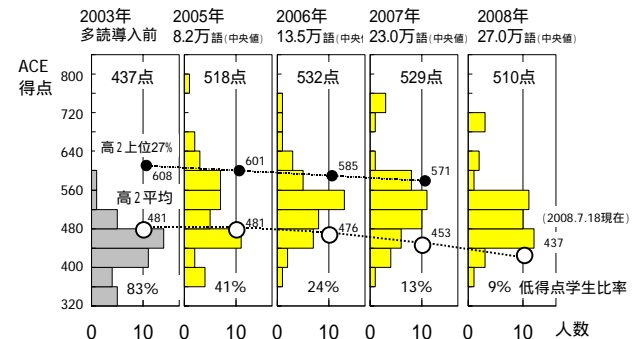


図5 多読・語数とACE得点分布の年度別比較

多読授業開始後の2005年度、E科2年では、2003年度には居なかったACEの高得点学生(高校2年上位27%平均点以上)が出現している(表3)。2005,06年の高得点学生は読書量がクラス平均より多くない者が多く、中学時代に英語が得意だった学生が10万語程度の多読でACE高得点を得たものと理解している。2007,08年の高得点学生は、読書量がクラス平均より一段多く、授業時間外にも意欲的に読んだ学生である。

表3 高得点学生数(2005~2008年度)

年度	高得点者読書量(中央値)	高2上位27%平均点	高得点者数
2003	なし	608点	0人
2005	11.5万語	601点	6人
2006	14.2万語	585点	4人
2007	60.1万語	571点	9人
2008	50.3万語	(571点)	5人

他方、低得点(高校2年平均点未満)学生の数は、読書量(クラス中央値)とともに減少しており、中央値が20万語を超えた2007年以降はクラスの1割まで減少している。多読開始前の2003年には8割だったことも考慮すると、10~30万語の多読が、ACE得点を着実に底上げしていることが分る。

ただし、低得点学生の読書量はクラス中央値と変わらないことから(表4)、読まない学生の得点が高いということではない。英語が苦手な学生への個別対応は、今後の課題である。

尚、本校学生のACE得点変化は、主として



Reading + Listening 部門によるもので、語彙・文法部門の得点変化は小さい。

表4 低得点学生数(2005~2008年度)

年度	低得点者読書量 (中央値)	高2 平均点	低得点者数 (高2平均未満)	比率
2003	なし	481点	34人	83%
2005	10.8万語	481点	17人	41%
2006	10.2万語	476点	10人	24%
2007	19.6万語	453点	6人	13%
2008	27.7万語	437点	4人	9%

### 5. 今後の課題

本校の第一の課題は、多読授業の全学展開である。専門科目として6年継続の多読授業を先行実施しているE科に対し、他学科の学生は、全学科共通科目「英語講読」(1~4年)で年4万語:4年間で16万語の多読を主に授業時間外の課題として課されているのみであり、その成果もTOEICでは測定できていない。継続的な多読活動を定着させるためには、課題学習を授業時間内の多読活動に転換し、コアとなる読書時間の確保が必要である。

そこで、本校では2008年度、本科1年次の全学科共通科目「英語会話」で、週45分×通年の多聴・多読授業を開始した。その結果、E科以外の4科学生の多読用図書館外貸出冊数(4~7月、図6)は2005年度からの増加傾向を継続しており、まずまずの滑り出しと考えている。

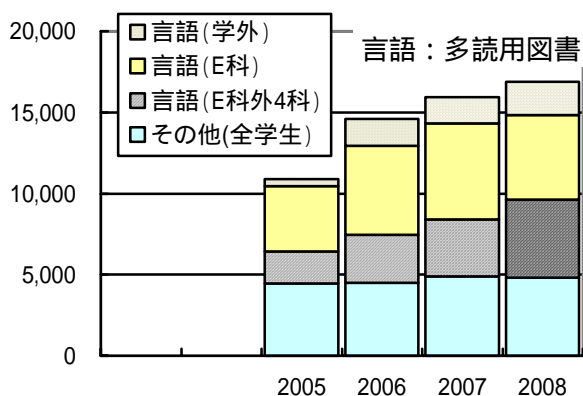


図6 多読用図書の貸出冊数(4~7月)

第二の課題は、多聴活動の本格展開である。多読授業2年目のクラスでWolf Hillシリーズの聴き読み(朗読音声を聴きながらテキストを読む)を勧めたところ、3~4割程度の学生が反応、試し

た学生からは「音声を併用した方が読みやすい」との声も聞かれた。50万語程度読んだ学生からは「聴き読みによりMTHの読書がやりやすくなった」との声もあるので、今後は多読1~2年目の学生に、よりやさしいYL0.8~1.2程度の図書の読み聴きを勧めてみたい。

第三の課題は、全学で多読を奨励する雰囲気作りである。E科の実践から、本校では(他の高専においても同様と思われるが)専門学科教員の働きかけ(励まし)が読書促進に有効なことが分ってきた。そこで、多読授業の全学展開に合わせて、若手を中心とする専門学科教員を対象に、自己啓発のための多読を推奨し、これを支援する活動を展開したいと考えている。

### 6. おわりに

豊田高専では、読書量、YL、読書速度、学生へのアンケート調査、外部試験等、様々な指標により、複数年継続の多読授業の状況を測定してきた。その結果、なるべくやさしい英文を読む方針を保持できれば、各測定指標の上昇を、ある程度、読書量と関連付けできることを確認した。

一方、100万語読破学生へのアンケート調査によると、(早期にやさしい英文なら読めるとの感触を得たあと)多読の効果を実感したのは100万語以上を読んでからの回答が多く、それ以前には、外部試験の得点上昇により多読の効果(読めるようになったとの実感を持たないまま)認めていることが分った。在学中に100万語以上を読破する学生が少数派となる学校教育の現場では、(外部に対する説明のためだけでなく)学生に多読の効果を知らせ、動機付けするためにも、外部試験を測定尺度として利用する必要があると感じている。

これらを基盤として、卒業時には過半数の学生が100万語を読破している(100万語読破は、当たり前)状況を、早期に実現させたいと考えている。

#### 参考文献等

- 1)西澤他、苦手意識を自信に変える、英語多読授業の効果、高専教育30号、pp.439-444(2007)。
- 2)TOEICテストDATA&ANALYSIS 2007。
- 3)西澤、吉岡、伊藤、英語運用能力に与える英文読書量の影響、工学教育協会年次大会予稿(2008)。